



ナナヨン 七四式戦車 と警務官

ナナヨン——1974年に制式採用された
74式戦車の愛称です。

2019/6 制作 神家正成

ミリタリー捜査サスペンス『ナナヨン 七四』

74式戦車——ナナヨンの中で死体が見つかる、それが物語の始まり。当初は単なる自衛官の自殺と思われたが、内部告発により、殺人の可能性があるという連絡が……。完全密室であるナナヨンの車内で見つかった遺体。自殺したと思われる人間の執務席の内線電話機から、自殺ではなく殺人だとの告発。74式戦車と死体で物語は幕を開ける。

主人公の一人は中央警務隊の若き女性警務官、甲斐和美 3等陸尉。防衛大学校を卒業して任官3年目の若い幹部自衛官。中央警務隊は、自衛隊内の犯罪の捜査、及び被疑者の逮捕を行う部署。中央警務隊隊長の大曾根 1等陸佐からの捜査命令を受け、甲斐は静岡県にある事件の現場の富士駐屯地に向かう。駐屯地にある128地区警務隊の捜査に協力する中、不可解な出来事が相次いで起こる。

もう一人の主人公は、元自衛官の中年男性、坂本孝浩。零細のソフトウェア開発会社の社長。取引先から大型の受注契約の解除を、突然言い渡されて倒産の危機にひんする。坂本の納入したプログラムのバグで10式戦車で事故が多発したとのこと。何とか回避すべく契約解除の理由を明らかにするために富士駐屯地に向かい、原因を探り始める。二人は、事件の背後に隠された思わぬ真相に迫っていく。

※括弧内のページ数は『七四』の本文中のページ番号です。



宝島社文庫：510P
780円＋税
2017/9/6 発売
ISBN：
978-4-8002-7609-4

前作と次作も好評発売中！
同一世界観の緩いシリーズです。
どれから読んでも楽しめます！
『赤い白球』もつながっています。

左記2作品は宝島社文庫、『赤い白球』は双葉社単行本です。

2014年2月
南スーダン PKO が舞台



2017年4月
千葉県柏市が舞台



1939年～1945年
朝鮮、東京、フィリピンなど



神家正成 公式ウェブサイト <https://kamiya-masanari.com/>
各作品の読後に楽しめるおまけ掌編をご提供しております。
日々雑記（ブログ）や「#記念日にショートショートを」、
自衛隊用語辞典、韓国辞典など随時更新中。Twitter や Facebook、
note にて最新情報を発信中。お気軽にフォローしてください。



警務官とは？

警務隊員は警察権を行使すること
明確にするため、一目で他の自衛官とは
違うと分かる服装をしているのだ。
警務隊の車両も基本的には白色塗装する。

（P48）

警務腕章
そして左腕に巻いている警務腕章——黒字に白文字で
「警務 MP」と記載されている——を見ると、
驚いた顔とともに警戒した眼差しを向けてくる。
（P43）

白いライナー

（P14）

自衛官でありながら司法
警察官、それが甲斐たち
警務官だ。いわゆる各国の憲兵、
MP——Military Policeと同じだ。
主な仕事は、各自衛隊内の犯罪の
捜査、及び被疑者の逮捕、
また交通規制、警護、犯罪の予防、
規律違反の防止などである。
ただ戦前の憲兵とは違い、
一般国民に対する司法警察権や
行政警察権は持っていない。

柴田の腰に巻かれている黒い帯革に装備されている、
黒い拳銃吊りが規則正しく揺れている。拳銃吊りは
一般の自衛官装備の茶色ではなく黒色だ。今は空だが
必要ときには、中に九ミリ拳銃——キウミリが収められる
警察官と違い、自衛隊の警務官は常に拳銃を装備しているわけ
ではない。同じように黒い警棒入れと手錠入れも見える。

（P47）

たいかく
帯革

拳銃吊り

手錠入れ

警棒入れ

戦闘靴

キウミリ
九ミリ拳銃

これがナナヨンだ！

甲斐も続く。黄色いテープを軽やかに跨ぎ、横に立って七四式戦車を見上げた。全長九・四メートル、全幅三・一八メートル、標準姿勢の全高二・二五メートル、全備重量三十八トン。大きくて高い——最初に戦車を見た時と同じ感想を思う。さすが陸戦の王者だ。威圧感がある。——そして美しいなと思った。(P50)

国産二代目の主力戦車

三菱重工業製

車体長 6.70m

稜線射撃と行進間射撃も可能

有効射程距離は弾種にもよるが3km程度

主砲 51口径105mmライフル砲 L7A1

砲弾は当初 APDS と HEP

現在では APFSDS と HEAT-MP

サーマルジャケット

74式車載7.62mm機関銃(主砲同軸)

ヘッドライト

管制前照灯

サイレン

ウインカー

アクティブ型赤外線暗視装置

ドーザー付74式戦車



操縦手席内部

ペリスコープ

速度計

操向ハンドル

回転数計



クラッチペダル

アクセルペダル

(P334)

「砲手、徹甲、右前方、二の台、戦車」
続けて車長の赤川が、早口で射撃指示を出す。
焦った声だ。砲手の柳の復唱の声と、装填手の高木の、「装填よしっ」の声がヘッドセットから聞こえてくる。
「撃てっ！」
「発射っ！」
一拍置いた柳の復唱と同時に、
射撃音が車内にも響き渡る。(P334)



74式60mm発煙弾発射機

12.7mm重機関銃 M2

投光器

キューポラ

アンテナ

装填手用ハッチ

車体下部 脱出用ハッチ

最高速度 53km/h

エンジン 三菱 10ZF22WT

空冷2ストロークV型10気筒

ターボチャージド・ディーゼル

720PS/2,200rpm

排気量 21,500cc

七四式戦車は公称、リッター四百メートルだ。搭載できる燃料は主タンクに約七百八十リットル。単純に計算すれば航続距離は三百十二キロメートルだ。もちろん戦闘行動中ではもっとと燃費が悪くなる。(P355)



潜水キットを取り付けることで2メートル強の潜水渡河が可能

装填手：士長～2士

車長：1佐～2曹

乗員4名



砲手：1曹～3曹

操縦手：3曹～1士

戦車の乗員というのは特殊な関係だ。鉄の棺桶と言われるように、何かあれば一蓮托生で一緒に死ぬのである。また一人のミスが乗員全員に、又は小隊、中隊に影響を及ぼす。それゆえ、家族以上に密接な時を過ごし、分り合えなければ、とても一緒に行動できない。(P173)

戦車にはエアコンなどは付いていない。いや夏は暖房、冬は冷房だ。七四式戦車の操縦手席の右足元には、エンジンの熱を利用した暖房器具が付いているが、北海道に配属された先輩の話では、まるで役に立たないそう。(P354)

「前へー」復唱と同時にクラッチペダルを緩めながら、アクセルペダルを踏み込む。目の前の回転数計が右端に振れる。空冷ディーゼルエンジンの甲高いうなり声がする。クラッチペダルへの力が緩むと回転数計が左に戻り、履帯が張る音が響き、三十八トンの鋼鉄の塊が、きしむ音とともに動き出す。

坂本は七四式戦車の操縦手席で、狭い三面のペリスコープからの視界に神経を集中させていた。大きめの筆箱のようなペリスコープが前方、右前方、左前方と並んで三つある。非常に視野は狭く、ハの字型の操向ハンドルを握る手のひらに、汗がにじみ手袋が湿った。(P332)